かんちゃんなみちゃん

上沢を住く

鈴木　克子

かんちゃんなみちゃんが函南駅ホームに降り立つと年の暮だというのにホッと暖かな空気に包まれていました。
お母さんの故郷函南町桑原で年末年始を過ごすためひと足先に二人でやって来たのです。
空気を胸いっぱい吸ってから改札口へ駆け出しました。
おじいちゃんが身を乗り出すようにしていつもの優しい笑顔で迎えてくれました。
「こんにちは。お父さんとお母さんは元日に来ます。僕達がお正月を迎える準備のお手伝いをしますね」
「こんにちは。私もお手伝いするわ」
二人がはずんだ声で元気よく挨拶したら、
「こんにちは。よく来てくれたねぇ。忙しいから助かるよ」
とおじいちゃんはにこにこして言いました。

大掃除もすみ明日はいよいよお正月、四人で年越しソバを食べているとおばあちゃんが
「明日、上沢のおばあちゃんの実家へ行こうね。かんちゃんなみちゃんは小さい頃行ったきりだから伯父さん伯母さんびっくりするわよ」
「うん、行ってみたい。上沢のこと色々と知りたいから」
「それは良いことだね。伯父さんは上沢で代々続く家の跡取りだし、伯母さんも上沢の出身だから詳しく教えてくれるよ」
「私お話を聞いて昔の子供達の遊びの画を描きたい」
となみちゃんも嬉しそうに言いました。

元日に東京からお父さんとお母さんがやって来て桑原の家はとても賑やかになりました。
桑原の熊野神社へ六人で初詣してから上沢のおばあちゃんの実家へ向いました。

伯父さんと伯母さんは大歓迎で、
「待っていたよ。よく来たよく来た。二人とも大きくなったねぇ」
「待っていたわよ。こんなに大きくなって。さあさあ上がって上がって」
挨拶がすんでからかんちゃんは、
「上沢の歴史やお正月の行事など教えてください」
伯父さんは大変喜んで上沢に人が住みはじめた昔のことから話してくれました。

「上沢の字下人原（あざげにんばら）の畑から旧石器時代と縄文時代両方のものと思われる石臼と石棒、石斧等が発見されたんだよ。
字山ヶ下（あざやまがした）の山の南側中腹に五〇数個の横穴古墳もあったんだよ。
五つの円墳以外に柏谷にある百穴と同じ横穴古墳も発見されていて、ここから出土した子持勾玉（こもちまがたま）は有名だよ。
字藤明（あざふじみょう）には戦国以前の古墳が数多くあり、刀、土器等数多く発見されて、字養沢（あざようたく）には養沢寺（ようたくじ）の田の中から五つの五輪の塔、焼米など発見されたそうだ。
字穴口（あざあなぐち）にも古墳が五、六個あったが鉄道工事により埋没してしまったそうだよ」

狩りをしたり魚を捕っていた生活から農耕を始めた人々は狩野川、来光川の流域の平野に田畑を開き祖先の墓の横穴古墳群が作られ明治十年には谷戸に五十二基、穴口に四基あったそうです。七、八世紀以前から相当の集落が作られていたと記録されているが、開発の波にのみ込まれ現在の数は不明のようです。

古代から上沢は気候温暖で丘陵を背にして住む家を作り生活するのに良い場所だったのでしょう。

明治以前は小田原藩の行政下、その後は韮山藩の治下、長い間上沢村と呼ばれていて、明治四年廃藩置県の公布となり函南町上沢となりました。

「上沢は古い古い歴史のある集落なんですね」

とかんちゃんは感心して言いました。

「そうなんだよ。今の上沢と書くようになったのは江戸時代の頃で、それ以前は佐藤の佐と波と書いて『佐波の郷』と呼びその上の方にあったので『上佐波』と言ったそうだ。

文献に出てきたのは平安時代から鎌倉初期以後だけどね。

沢という字には『水の集まる所』という意味があるんだよ。

上沢を図面から見てみようか」

伯父さんは昭和五十一年に発行された『上沢誌』を開いて説明してくれました。

「函南駅から大場駅に向かって元役場のあった八ツ溝辺りまで来光川と道がほぼ平行しているよ。道沿いに二葉幼稚園、臨光寺の上の方に熊野神社があるんだ。入って来た道に戻り西へ向うと間もなく東光寺だよ」

上沢区の氏神様である熊野神社は一五四二年戦国時代、足利十一代将軍義晴の時に創建されたが、昭和五年の北伊豆地震で社殿は壊れ昭和七年に再建されました。

「熊野神社の例祭は七月七日だよ。末社が七つあってその中の一つ八坂神社のお祭りは『お天王様』のお祭りといわれ七月十五日なんだ。その日は青年団の人達がお御輿を担いで家々を廻り、現在の上沢団地の長い坂道を上がった所にあった『南方教会』まで行ったんだよ」

「祝い酒をもらい酔っぱらってふらふらしながらお御輿を担いで行ったわねぇ。『南方教会』というのは農業をやる兵隊さん達の養成所で池もあり、食糧用の鯉を養殖していたわ」

祭典の日酔っぱらっていたので寄付が少ない家の田んぼへお御輿ごとつっ込んだり、又ある時は番人の目を盗んで、南方教会の鯉を釣って持ち帰ったり若気の至りで悪いことしたなぁと伯父さんは反省しておりました。

「そのお御輿は今でも担がれていますか？」

「いやぁ実は盗難に遭ってね。金を剥がされバラバラにされ使えなくなったんだよ。新しいのを愛知県の方の刑務所作業所へ注文したのだが、出来上がったのは大きくて重くて担いで家々を廻ることができないんだよ」

「その新しい大きなお御輿が届く日役員だったので受け取りに出たのよ。トラックからお御輿を降ろしたのは屈強な刑務所の人たち、もう怖くて足が震えたわ」

伯父さんはお御輿を担いだ若かりし頃を思い出し少し寂しそうな顔をしていました。

その大きなお御輿は祭典の日公民館の玄関前に飾られ、四台ある子供御輿が町内を練り歩くそうです。

「この上沢には韮山往還という韮山の代官様達が江戸へ上京するために使う主要道路が通っていたんだよ。上沢から山中新田、旧東海道へと通じていたんだ」

「熱海へ行く道もありましたか？」

「勿論あったよ。伯父さんの小さい頃馬力（ばりき）に農産物を乗せて平井から軽井沢峠を越えて、『熱海あきない』に出掛けたよ。年の暮には餅ソバの注文を受けて運んだものだ。山道はすべりやすいので馬にわらじをはかせたよ。冬には馬力（ばりき）にコタツを乗せその中にもぐってガタゴト道を揺られて行ったなぁ」

伯父さんは幼い頃を思い出して懐かしそうに言いました。

「丹那トンネルが完成して函南駅ができてから小学生の僕は、切符が半額だから熱海の洋菓子店へ牛乳を運ぶお手伝いをしたよ。

洋菓子店の御主人は『お手伝いをしてえらいねぇ。ご褒美だよ。これ食べて行きな』とお菓子をくれたけれど、お礼を言って『家の人に食べさせたいからもらって帰ります』と言ったら『僕、えらいね。これも持って帰りな』と御主人は余分に持たせてくれたんだよ。

牛乳を運ぶのは重たくて大変だったけれど、お店の人に褒められるし家へのお土産もあって嬉しかったよ」

「兄さんがもらってきてくれるお菓子とても美味しかった。今でもあの味を忘れることができないわ」

伯父さんとおばあちゃんは子供の頃を思い出してしみじみと言いました。

「伯父さん達の子供の頃のお正月の様子を教えてください」
「伯父さんの家は農家だったし、その頃はどこの家でも元日から三日までの朝食づくりは男衆の仕事だったんだ。
神棚に小さなお餅を供えてからお雑煮を作って女衆を起こしに行ったんだよ」
「そうだったわね。一年中特に年末は忙しかったから三が日の朝ゆっくり眠れたのがとても嬉しかったわ」

「四日には『初山』と言って芋の苗床を作る落葉かきに山へ入ったんだよ。子供達も手伝ってね。その頃四日は地主さんの山へ入ることを許されていたんだよ。
熊手の大きいのでかき集め馬力に入れて運んだもんだ。冬の寒い時期だから馬力にコタツを乗せ暖まりながらガタガタ道を揺られて山へ行ったよ」
「家中総出の初仕事だったんですね」

「七日には『七草粥』を作って神棚に供えたわね。七草を摘んできて洗ってまな板に乗せ子供達は、
七草なずな　唐土の鳥と
日本の鳥と合わせて　バータバタ
と歌いながら七草をトントン叩いて切ったわ」
「子供達が歌いながら七草粥を作り家中で食べるのは賑やかで楽しいわね」
春の七草にはそれぞれ昔からいわれや意味があります。

せり＝競り勝つ　香り良い若葉を食用するおひたしや鍋物に使う。
なずな＝撫でて汚れを除く　ペンペングサという呼び名で知られている。
ごぎょう＝仏の体　かつて人々の身代わりとして川に流す風習
はこべら＝繁栄がはびこる　一般的にははこべと呼ばれ密集した群落を作る。
ほとけのざ＝仏の蓮座
すずな＝福を呼ぶ鈴　かぶのこと。昔かぶは葉を重用しすず菜と呼んだ。
すずしろ＝汚れのない清白、純白　大根のこと。

「十四日にはお正月のお飾りやすす払いの竹やお札（ふだ）等を焼くどんどん焼きが朝の暗いうちから行われたの。子供達は七日が過ぎると家々を廻りお飾りを集め、大きな太い竹を中心に小屋を作ったのよ」
「当時どんどん焼きは上沢四ヶ所で行われていて六年生が先頭に立ってやっていたんだ。他の場所の人達が壊しに来ることがあったので、どんどん焼きの竹の小屋に泊まって見張ったのも懐かしい思い出だなぁ」
「子供達の書き初めも焼いて最初の燃えがらが高く上がると字が上達すると言って喜んだわねぇ。『風の三郎』と言って先が三つに分かれた木の枝の先にお団子を刺し、これを焼いて食べると風邪を引かないと言われたわ」
「十四日の朝には小豆粥を作り柿の木にそのお粥をつけてすりこ木で叩き、大声で唱えると沢山実がなると言われて子供達は大声を出して唱えたわねぇ。

柿の木なーれ　千百俵万百俵になろうと
申―せ　ならないとこの木をぶっ切るぞ

高い所へなると鳥が取るぞ
低い所へなると子どもが取るぞ
中どこへたんとなーれ
中どこへたんとなーれ
『成木責め』と言って昔の農民達がその年の豊作を願ってやって来た行事なんだよ」

その時玄関で声がしました。
「おめでとうございます。まさえちゃん来ていますか？」
お客さんはおばあちゃんの仲良し幼馴染みのちよちゃんです。
「あっ！あの声はちよちゃんだ。おめでとうございます。さあ上がって上がってちょうど良かった。今東京から来た孫に上沢の昔のこと話していたのよ」
「あの頃は楽しかったわねぇ。家が近かったから毎日まさえちゃんと遊んだもの。家の手伝いもしたけれど」
「子供の頃の女の子の遊びを教えてください」
となみちゃんは言いました。
「まりつきをよくしたわねぇ。歌を歌いながらまりをついたのよ」
あんたがたどこさ　肥後さ
肥後どこさ　熊本さ
熊本どこさ　せんばさ

せんば山には　狸がおってさ
それを猟師が　鉄砲でうってさ
煮てさ　焼いてさ　くってさ
それを木の葉で　おっかぶせ
「もう一つ地名を言うまりつき歌あったねぇ」
イッセー　ニイガタ　ミカワー
シンシュウー　コオベー　ムサシー
ナゴヤー　ハコダテ　キュウシュウ
トオキョウー
おばあちゃんとちよちゃんはまりつき歌を歌ってくれました。
「歌いながらまりをつくのって難しくない？」
「難しくないよ。慣れてくると股の下くぐらせて手で取り又まりつきを続けるのよ」
「ちよちゃんは歌もまりつきも上手だったねぇ」
「まさえちゃんも上手だったよ。お手玉の歌覚えてる？」
「うん覚えているよ。意味がよくわからない所もあるけれど」
オンシロ　オシロノ　シロキャノ
オクマサンアン　サイゾオサン
オタボコモッテキナ　オチゴロサン
タバコノケムリワ　リョハッサン

ミセエスワルハ　バントオサン
ミセニワオチゴロ　ナライフデ
ナラアタオフデワ　オサメマショ
ヒイヤフー　ミイヤヨー　イツムー
イツムアネサン　オチゴロオイデノ
エンガツサンガツ　ノボルトオシャルー
ノボルミヤゲニャ　ナントナニモラッター
イチニヤオオバコ　ニヤモトテバコ
サンニャサシガネ　シロジノユカタ
ゴバンカンザシ　ロクバンカガミ
シメテヨイノワ　シュスノオビー
シュスノオビー　マズイッカン
オワリト　モオスー

「おはじきも竹ひごも楽しかったねぇ」
おばあちゃんとちよちゃんは子供の頃に戻ったようにとても楽しそうでした。

「平井区では水で大変苦労したお話を伺いましたが上沢区ではどうでしたか？」
「上沢区も水で苦労したねぇ。上水道が引かれるまではつるべ井戸や自然の湧き水を使用していたのだが、高い所に住んでいた家では手桶一杯の水を汲むのにも大変だったよ」

昭和七年丹那トンネル工事で出た湧水を上水道に引く請願書を、熱海建設事務所に出し、続いて鉄道大臣にも請願し昭和十年区民待望の上水道が完成して、長年の水不足から解放され区を挙げて喜びました。

「丹那トンネル工事に伴なって大正九年六月工事用資材運搬のために大場駅から丹那トンネル西口工事現場まで軽便線路が敷かれたんだよ」

人々は初めて見る煙をはいて走る汽車にびっくり仰天して歌を作りました。

おじいやおばあや大場(だいばぁ)こう地(ちよ)を見ろよ
火事が箱しょって逃げる
ばか　ありゃ汽車だ

お母さんにおんぶされて子守歌のように繰り返し聞いて育った軽便鉄道の歌を伯父さんは懐かしそうに歌ってくれました。

「その軽便鉄道には客車も付いていて住民の足としても活躍したそうよ」

しかし昭和十年工事終了と共に線路跡は農地となり歌もいつしか歌われなくなりました。

丹那トンネル工事は大正七年五月延長七八〇四米の工事に着手したのです。

崩壊や湧水等の事故、北伊豆地震の影響を受け、死者一一二名、負傷者三三二名、完成までに十六年四ヶ月、昭和九年十二月一日に開通しました。

長い間には上沢区でも大きな災害にたびたび見舞われました。

記録に残る慶安四年（一六五一）伊豆国の洪水から昭和三十三年の狩野川台風まで、十二回もの大洪水の

被害を受けました。
昭和二十三年のアイオン台風によって来光川水系は被害を受けて「上沢は田畑の流失堆積が甚だしかった」と記録されています。

渇水問題もありました。昭和九年七月二十三日夜半突然上沢大竹を襲った台風は大竹（鉄道用地内）上沢水道取入口を始め、第一第二の水道用貯水タンクの破壊が行われたのです。此の突風は八ツ溝用水組合が其の目となった人災でした。
幸い人命に損傷はなかったが其の目の底は深く、即ち丹那トンネル「国鉄」の工事に依り箱根山を水源とする用水不足に源を発し、丹那盆地区谷下山水系と、箱根山を水源とする来光川関係部落共々に鉄道省への陳情が漸く聴き済となり補償金を各区に交付されたので其の金額の不平が其の台風の目となったといわれております。

昭和二十三年二月二十三日には大火災が発生しました。原因は子供の弄火により折からの強風にあおられて、全焼七軒半焼一軒の上沢区始まって以来の大火となりました。
伯父さんは手にした『上沢誌』から話してくれました。
「上沢区の皆さんは幾多の困難を乗り越えて現在の上沢区を築いてこられたのですね」
「かんちゃんの言う通りだね。こうして『上沢誌』を改めて読んでみると色々なことがよくわかるよ」
「上沢区の土地だった所から『新幹線区』と『パサディナ区』が誕生したんだよ」

東海道新幹線東京大阪間の新丹那トンネル工事は、昭和十六年六月に国鉄直営で始まり函南口工事に従事する職員並びに労務者の宿舎を、上沢字藤明（あざふじみょう）の田畑を買って建設したのです。

職員宿舎二十六戸　労務者宿舎一〇〇戸

職員合宿所一棟　共同浴場一棟

工事は突貫工事で進められたが太平洋戦争の拡大と共に物資や労務者の不足でついに工事は中断されました。

そして昭和三十五年四月再び着工され新幹線は昭和三十九年十二月一日に長い年月を経てようやく開通したのです。

工事に関わった皆さんがそのまま住んでおられたので、函南町は昭和二十九年「新幹線区」と認定しました。

「『新幹線区』って一度聞いたら忘れられない名前だけど、誕生にはそのような歴史があったのですね」

「上沢区と交流が生まれて熊野神社の祭典には新幹線区の代表が参列し、お御輿を担ぎ参拝する慣習となっていったんだよ。

パサディナ区の予定地は昭和四十六年上沢区の共有地を大都リッチランドへ区民の総意で売ったんだよ。そのお金で昭和四十七年運動場、卓球室もある近代的な公民館が建設されて十二月二十五日落成式が行われたんだ」

パサディナ区はアメリカカリフォルニア州のパサディナ市と同緯度ということから名付けられました。

富士山を北に西は駿河湾、南に天城連峰、東に箱根の山々を望む丘陵地帯で昭和四十九年九〇〇区画の開発が完了して誕生したのです。

「上沢区の土地から誕生した『新幹線区』と『パサディナ区』は兄弟みたいね」
「なみちゃんの言う通りだね。仲良く助け合ってお付合いしていかなくてははね」
『上沢誌』の序文に寄せられた当時の山本敬三郎静岡県知事も次のように書かれておられます。

序

田方郡函南町上沢区で、区のすべてを集大成した〝上沢誌〟を刊行されると聞き、喜びにたえません。

私たちは生まれ、育った郷土に、大きな誇りをもち、もっともっと大事にしなくてはなりません。これは、現在住んでいる土地についても同じことです。隣同志の交際を通じ、あたたかい心を交流させ、良好な人間関係が築きあげられる社会、それがすべての基礎だからです。私がかねがねコミュニティ（近代社会）について語り、県政に反映させようとしているのも、このためです。近隣社会の和は地域の和となり、ひいては市町村、県、国とその和を広げていくことでしょう。

そうした意味から、この上沢誌の刊行は、まさにわが意を得た事業であり、心からお喜び申し上げます。

もう一つの喜びは、この上沢誌の編集を区の老人会である福寿会が手掛けたということです。老人対策が叫ばれて、すでに長い年月を経ています。もちろん恵まれぬ老人に対し、あたたかい援護の手をさしのべることは必要不可欠のことです。しかし、それにもまして、これからの高齢化社会に大切なことは〝生きがい〟ではないかと思います。長い人生の体験と知恵を生かして社会に奉仕する、社会のお役に立つという〝生きがい〟こそ、私の老人対策の大きな柱となっているものです。

この〝上沢誌〟が老人会の手で編集されたということは、私にとって二重の喜びになるものといえましょう。

どうか、この上沢誌によって、郷土の歴史と現状を知り、四年間にわたる老人会の血のにじむような努力を体感され、よりよい近隣社会への道を歩まれるよう希望して刊行のお祝いとさせていただきます。

（原文のまま）

上沢区の歴史、昔のお正月行事、昔の女の子の遊び等教えてくださった伯父さん伯母さんちよちゃんにお礼を言ってお別れをし、上沢区の熊野神社へ向かいました。

熊野神社は臨光寺入口の狭い急坂を上がってつき当りにありました。

「ここには不動堂があって明治十三年から函南学校上沢分席という函南小学校の分校があったのよ。低学年の子供達が通ったのね」

明治六年学生頒布で小学校が各地に建設されました。

明治八年頃の上沢区の就学該当者五十二名で約八〇％が就学断書（お断り）を出しています。

明治十三年八月に開設された上沢分席の人数十四名、小学校の月謝四銭（二人以上の家は一人二銭）。

その頃の子供は働き手として必要だったのと、授業料を払わないと学校へ行くことができなかったのです。

少しでも学校へ行く子供達が増えるようにと通学に便利な各地区に分席ができたのです。徐々に通える子供達が増えて上沢分席は明治十九年本校に統合されました。

「家のために働いて学校へ行かれない子供達がいたなんて知らなかったわ」

「僕たちは学校へ行くことができて色々と学べるから本当に幸せだね」

階段を上がって行くと木々に囲まれたお社があり、その左手の建物の中にお御輿がありました。
「大きくて立派なお御輿だね」
「本当！　とても重そうね」
二人は大きくて立派なお御輿にびっくりしました。

熊野神社に参拝し清々しい気持で二人は言いました。
「昔の子供達は家のお手伝いや遊びにも一生懸命だったということがよくわかったわ。私も昔の子供達に負けないよう頑張りたい」
「そうだよね。おばあちゃんの故郷上沢の歴史がよくわかったし、上沢誌に詳しく載っている遺跡めぐりや出土品もいつか見たいな。今回もおじいちゃんが教えてくれた温故知新の大切さがよくわかったよ」

そう話すかんちゃんなみちゃんの顔は希望に輝いていました。
二人を見つめるおばあちゃんは二人の成長が嬉しくて幸せな気持ちに包まれました。

参考図書

『上沢誌』上沢福寿会／編　上沢福寿会　一九七六年
『函南町誌　上巻』函南町誌編集委員会／編集　函南町　一九七四年
『函南町誌　中巻』函南町誌編集委員会／編集　函南町　一九八四年
『函南町誌　下巻』函南町誌編集委員会／編集　函南町　一九八五年

鈴木克子さんの「かんちゃんなみちゃん」シリーズの
１～３作目は以下の二次元コードから読むことができます。

１作目　　２作目　　３作目

かんちゃんなみちゃん　上沢（かみさわ）を往（い）く

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　鈴木（すずき）　克子（かつこ）

令和８年度 函南町立図書館８月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

かんちゃんなみちゃんはお正月に函南町上沢の伯父さんの家を訪ね、上沢の歴史や昔のお正月行事遊び等を聞き、上沢区から新幹線区パサディナ区が誕生したことや、明治8年頃子供は家の働き手で就学率が20％だったことを知って驚きました。

